世界各地における諸宗教間対話

ワークショップに関する報告

J・W・ハイジック
James W. Heisig

2005年3月22日に、世界9カ国から代表者が集まって、それぞれの地域における宗教学と宗教間対話の現状を概観した。これはその前日行われた中東の宗教間対話についてのディスカッションを補足するものである。以下は、このワークショップの概略である。このワークショップの開催にあたり、サントリー文化財団の研究助成を得た。記して感謝申し上げたい。

2005年の3月に、所報の別の箇所で報告されているように、第19回国際宗教学宗教史会議世界大会が東京で開催された。日本の歴史上、これまでにないほど世界中から多くの研究者が集うこととなった、この好機を利用して、南山宗教文化研究所は国際大会の参加者を数名招いて、ともに「世界各地における諸宗教間対話」と題する1日のワークショップを開催した。

宗教間の対話が一世代以上にわたって盛んに行われてきた地域からの報告と、対話がほとんど始まってもいないか、ようやく対話への足がかりを見出したばかりの地域からの報告との対比は、啓発的でもあり、また議論を行う上での豊かな手がかりとなった。この話題に対して共通のフォーラムを設定すべく、発表者にはまず、彼らそれぞれの地域の宗教多元主義の特性と宗教研究の現況を概観してもらうことにした。そして、それを基礎として、異なる宗教伝統間での対話の発展と将来の見通しについて話し合うことにした。これらの報告の後、全体で討論を行い、他の国々からの参加者がこれらの報告に対してそれぞれの見解を付け加えることができた。

結局のところ、宗教多元主義の事実がいかに認識されているか——支配的な宗教や正統派への脅威としてか、あるいは宗教心のある個人や既成宗教にとっての一つの好機としてか——が、対話へのアプローチを決める重大な

要因であった。そして、次に、その認識は学問分野としての宗教学の発展とも密接に関係していたのである。

ハンガリー

午前のセッションは、トト・ミハリー（Mihaly Toth）博士のハンガリーの状況に関する報告をもって始まった。トト博士は、ハンガリーとドイツで神学と哲学を修めてから、セゲトとブタペストの大学で教鞭をとっている。彼は初めに、古代のシャーマニズム的タルトスの祭儀から中世の東西のキリスト教への変遷を手短に要約した。プロテスタント宗教改革の時代に、大多数――ほぼ 60 ～ 80%――がルター派やカルヴァン派に改宗した。反宗教改革の動きが現われると、カトリックの伝統が多数派に復帰し今日に至る。40 年におよぶ共産主義統治の間、ハンガリーの宗教状況についての信頼できる統計はなかった。2001 年の国勢調査のデータによると、非歴史的諸教会が占める割合は人口のわずか 1.1%である（伝統的なキリスト教諸教会の“名ばかり”の教会員と比べて、いくつかの教団は概してはるかに活動的であるが、所属を公言しないようにという忠告を受けていた場合があり、実際はこの 2 倍近くになるだろう）。非キリスト教徒のグループの間で最も大きいのは、国際クリシュナ意識協会（ISKON）である。仏教徒の規模はその半分のおよそ 3000 人でしかない。

1996 年には、共産主義の統治下では禁じられていた宗教学を大学のカリキュラムに導入するための努力がなされた。今年はセゲト大学から宗教学の最初の卒業生が出ることになっている。さらに、オンラインの定期刊行物（Liminalitas）と学術雑誌（Religion and Society in Central and Eastern Europe）もすでに公開されている。昨年、Apor Vilmos Catholic College がキリスト教神学のプログラムを開始し、ハンガリーで最初の宗教学雑誌 Vallastudomanyi szemle の刊行に乗り出した。三つ目の試みは、ハンガリー科学アカデミー哲学研究所が組織した、Uniworld という、学位

は出さない「バーチャル大学」のプログラムである。

このような状況の中では、宗教間対話は伝統的なキリスト教諸教会の間の超教派的な接触に集中しがちであって、それに次いでユダヤ教とキリスト教との対話に関心が向けられている。キリスト教徒とクリシュナ教徒との交流についてもいくらかの進展が見られ始め、フォコラーレ運動も「偉大な諸宗教との対話の中で」という聞きなれない名のより包括的なプログラムを企画している。それ以外の個人の努力の他に、「三文化グループ」として知られる新しい試みがキリスト教、仏教、科学の間の対話を促進している。最後に、数百名の学生を抱える、中央ヨーロッパで最大の仏教大学であるブタペストの「仏門」仏教大学について触れておかなければならない。古典的な仏教学に加えて、その自由なカリキュラムには、極東の諸宗教に関する科目も含まれている。この大学は、学術的な対話を推進するためにしばしば開かれるイベントの支援も行っている。

ルーマニア

ルーマニア・アカデミーの哲学心理学研究所のミルチャ・イトゥ (Mircea Itu) 博士は、ルーマニアの宗教研究の歴史とそれが直面している諸問題について詳細な説明を行った。その歴史と諸問題のすべてが、宗教間対話の進展を妨げている。

多民族的なルーマニアの人口（88%がルーマニア人）の大部分は、キリスト教徒である。自律的なルーマニア正教会がその 8 割を占め、ローマ・カトリック教会とギリシア正教会、およびプロテスタント教会が残りを占めている。ユダヤ教徒は主に北部地域に集中しており、それよりかなり少数のイスラーム人口は南東の黒海沿岸に集中している。ヒンドゥー教、仏教、儒教は、ほぼ外国大使館の職員に限られている。チャウシェスクの独裁政権の間、「宗教」という言葉は、事実上、公刊された書物から消えていた。結果的に、宗教学は遅れて始まった。現在ですら、宗教学は神学に支配されている。初等・中等教育の宗教に関する科目は、1990 年以来必須科目であるが、もっぱら正教会の聖職者と神学の専門家によって教えられている。

他の宗教を研究したり教えたりすることは、キリスト教の信仰に対する侮辱とみなされているため、宗教学の科目を開設している教育機関はほとんどない。イトゥ博士はインド宗教とミルチャ・エリアーデの学問の専門家として個人的な経験を話しながら、彼の授業が日常的に監視されている様子を述べた。出席している聖職者によって、キリスト教や他の宗教伝統に関して語られたことはすべて上司たちに報告されているという。

事態は、2004 年に起こった「絶対性への霊的統合運動」として知られる、いかがわしいヨーガ運動をめぐる大スキャンダルによって、悪化している。運動の創始者である Gregorian Bivolaru が詐欺師として暴露されて以来、ヨーガとインド宗教一般のイメージは大衆の間で評判を落としている。

ルーマニア・アカデミーもまた、東洋の哲学・宗教の研究のためのプログラムを導入するのに必要な資金の割当をしぶっている。イトゥ博士は、現在のところ、その分野の唯一の代表である。知識人による学会設立のためのいくつかの試みは、内部の争いによって妨げられている。学術的な基礎を欠いている上に、世界の宗教を研究したり、その文献を読んだりする基本的な寛容さすらみられないので、現在、宗教間対話がほとんど休止状態にあるのは驚くべきことではない。

ウクライナ

オデッサ国立法律アカデミーの助教授であ

るイフゲニヤ・ドディナ (Yevgeniya Dodina) 博士は、宗教的な機関の法的権利という視点から、宗教間対話に関する問題を取り上げた。こうした権利は、共産主義統治下では厳しく制限されていたが、その回復が別の問題を引き起こしている。その問題の根本は、中世、すなわち正教会とローマ・カトリック教会の伝統との関係にまで遡る。もしこのハードルが克服されなければ、ウクライナでは宗教間の対話はほとんど変わらないと博士は示唆した。

この国では今日、およそ 55 の教派が存在し、それらのほとんどが外国の組織と関わりを持っているが、ウクライナ民族を構成している人口の 70%は、少なくとも名目上は、キリスト教徒である。1991 年以降、さまざまな宗派に属するおよそ 100 の仏教団体が現われているが、彼らの活動は社会の周辺部に限られている。彼らはキリスト教会との対話に関わるどころではなく、現在もなお、彼らを法的に保証する権利を求めて奮闘している。したがって、ドディナ博士は伝統的なキリスト教諸教会自身の間の対話を妨げる軋轢に焦点をあてた。

対立の歴史を手短に概観した後、博士は 1989 年に行われた教皇ヨハネ・パウロ二世とミハイル・ゴルバチョフとの会談に注意を向けた。その会談の後、ギリシア・カトリック教会がウクライナで合法化された。ヴァチカンとコンスタンティノープル総主教との関係は改善されたが、ヴァチカンの支援を得てウクライナにギリシア・カトリック教会の管区を設置したことが、総主教によって「あらゆる正教会に対する敵意ある行為」とみなされた。

ギリシア正教会とローマ・カトリック教会が布教を活発に行っていることで、事態はさらに悪化している。超教派の対話がしばしばそのような努力の隠れ蓑として使われてきたという事実が、対話の進展を困難にしている。共産主義統治下で没収された所有地の配分を解決するという問題や宗教団体の法的地位を明確にしようとする新たな努力とともに、キリスト教諸教会内の対話が今日のウクライナにとって急務である。

ベルギー

かつてルーヴァン・カトリック大学に所属し、現在はボストン・カレッジに在籍するカトリーヌ・コルニール (Catherine Cornille) 博士は、まず初めに、ベルギーの置かれている状況はヨーロッパ北西の地域の多くによく見られるものとして、ベルギーが宗教学や宗教間対話に果たしてきた重要な役割に注目した。

自分をカトリック信者と考えているおよそ 80%のベルギー人のうち、積極的に宗教を実践しているのはおそらくわずか 10%にすぎない。カトリックに加えて、プロテスタント諸教会、正教会、ユダヤ教、イスラームもまた国家によって承認されている。国家は、彼らに政府の助成金を与えている。ベルギーでは、仏教者の存在も重要である。彼らは特にチベット仏教の僧が 1980 年代に到来してから活気づいたが、仏教伝統の幅広いスペクトルとさらに日本からの新しい宗教運動を含み込んでいる。政治的、法的、宗教的レベルで、最も重大な問題は、イスラームの受容に関する問題である。

コルニール博士は、ルーヴァン大学を例に挙げて、宗教学の状況に言及した。ルーヴァン大学は、エティエンヌ・ラモットやルイ・ドゥ・ラ・ヴァレ・プサンのような世界的に名高い学者を誇りとしていたが、1960 年代末になってようやく東洋の宗教が、文献学部以外で、神学部の学生に講じられ始めた。それでもやはり宗教学の位置づけは今日にいたるまで不確かなままであるようだ。

カトリックの国として、ベルギーは、宗教間対話を積極的に推進する数多くの研究機関を設立している。博士はイスラームとの対話を進

めるEl-Kalimaと、仏教との対話を進めるVoie de l'Orientを例として選んだ。両者は1980年代末にブリュッセルで発足した。イスラームとの対話は、中東に対する政治的雰囲気の変化、ヨーロッパでのムスリムの存在に反対する気運の揺り返しを反映して、何年にもわたって緊張している。

博士自身が活動しているVoie de l'Orientは、定例会、ワークショップ、瞑想会、修養会を支援している。過去10年以上にわたって、Voie de l'Orientはヨーロッパ中の宗教間対話に積極的に関与している人びとやセンターの代表者を集めている。2000年に開かれた集会では、「多宗教所属」の問題に焦点をあてた。これは、近年、伝統的な対話の定義に異議を唱えるかたちとなった。アカデミックなレベルでは、博士はイエズス会が創立したアントワープのUCSIA Instituteの調査や活動が急激に拡大していることについて特に言及した。

初めは、カトリック信者が中心となって他の宗教との対話を進めていたが、最近はユダヤ教徒もまた率先して取り組むようになっている。国家のレベルでは、政府が文化の出会いに関する会議を組織し、政教分離を厳格に維持しようとする他の国々ときわだった対比をなす動きを見せている。

キューバ

ハバナ大学の客員教授であるアウレリオ・アロンソ・テハーダ(Aurelio Alonso Tejada)博士は、キューバのコンテクストの中では、宗教間対話の「間」が必然的に単一の宗教内のさまざまの部分、たとえば、宗教を信奉する者と無神論者との間、宗教と社会一般との間の対話を含むということをまず指摘した。これらを一つでも排除すれば、努力は孤立し、対話の幅広い可能性を狭める危険がある。

もう一つの重要な要素は、キューバ、ハイチ、ドミニカ共和国、プエルトリコのような国々に見られるラテンアメリカ文化とカリブ文化の収斂である。これらの島々の文化については、スペインとポルトガルの植民地支配によるカトリックの優勢と奴隷貿易とともに到来したアフリカの影響に加えて、植民地の諸勢力(スペイン、フランス、イギリス、オランダ)を通し、またアフリカ、ムスリム、ヒンドゥーの影響が混ざり合い、多文化的な構成を持っていることをいつも考慮に入れなければならない。キューバは、――単純に、博士の評価では――宗教を私的なことがらと捉えることによって厳格な政教分離を保持しようとしてきた数少ないラテンアメリカの国の一つである。たとえそうであったとしても、伝統的カトリシズムの活力も、そして最近、カトリックの影響を衰退させているペンテコステ運動と新宗教の運動も、民衆の宗教性に強く拠っており、このことは誤用されたリベラリズムも、ラテンアメリカ全体と共有している。

コロンブス以前、植民地時代、植民地独立後の、こうした状況につつまれている多様な宗教運動や組織について手短に説明した後、テハーダ博士は、カトリックのヒエラルキーが人びとの実際の信心や、ラテンアメリカ生まれの社会正義を力説する「解放」の神学に歩み寄ろうとしないために、宗教間の「対話」などと言っても虚ろに響いてしまうと主張した。同時に、博士は最近の宗教グループの原理主義的、終末論的、排他主義的論調が同様の影響を及ぼしていると強調した。こんな状況下では、敵対者は相互に対する態度を和らげるどころか、むしろ頑なにしてしまうだろう――こうして人々の名において働いているはずなのに実はその人々を犠牲にしてしまっているのだ。

ブラジル

リオ・デ・ジャネイロのカトリック大学の神学・人文科学部の教授で、現学部長であるマリア

＝クララ・ルシェッティ＝ビンジェメール (Maria Clara Lucchetti Bingemer) 博士は、初めに、政府による神学校と神学部の公認手続きが進行中であることに言及した。宗教学は、それに対し、ブラジルでは公立大学でも私立大学でも急速に成長している。当初、宗教学は社会科学的であったが、最近は世界の諸宗教の神秘主義にも強い関心を示している。

ブラジルは（少なくとも名目上の所属の統計によると）「世界最大のカトリック国」と呼ばれているにもかかわらず、ほとんど匹敵するものがないくらいに、さまざまな宗教伝統が見られる。伝統的、歴史的なキリスト教の伝統の中で、プロテスタンティズムとペンテコスタリズムが成長しているのに対し、カトリック教会は縮小している。南部の Allan Kardec（1804-1869）［訳注―フランス人の教育学者・心霊主義者］の信奉者やアフロ・ブラジリアンの諸宗教のような「心霊主義的」運動の根強い伝統も存在する（これらはときどき誤って、「低心霊主義運動」と分類されている）。これらは今日では国中に広まっている。最近の統計によると、これらの宗教の中で最も重要なカンドンブレは、黒人人口が多いバイアのずっと大きい黒人住民の間でよりも南部に広まっている。

カトリックはヨーロッパからの征服者によってブラジル人に押し付けられたが、彼らの入信は名目上の同意にすぎなかった。こうした状況は、彼ら独自の宗教的あり方を守りながらキリスト教徒であると公言するカンドンブレのような運動の指導者の中に現在も存続している。程度の差こそあれ、二重所属という現象はこの国のいたるところで見出される（おそらく北東地域のカトリック信者に最も著しく見られはするが）。そのうえ、東洋伝来の新宗教や、アマゾンの植物から作られた幻覚性飲料の飲用も行なう環境意識を持った新しい宗教の成長も見られる。これらの宗教は知識人や都市の中産階級の間で最も人気がある。たとえそうでも、これは、今日のブラジルで繁栄し、政治的領域でもその存在を知らしめている多くの宗教運動のごく一部にすぎない。

たとえ上述したような内的シンクレティズムがはっきりとした「対話」のレベルまではめったに達しないとしても、ブラジルにおける公式の、もしくは知的レベルでの宗教間対話は、複数宗教への帰属という事実から切り離され得ない。それにもかかわらず、このことは超教派の対話のレベルでも、異なる伝統間の対話のレベルでも、焦点となってこなかった。「諸宗教の神学」に関する研究が、ゆっくりとではあるがキリスト教神学校の必修科目になりつつあるので、この複数帰属のことも焦点をあてられる日が遠からずやってくるだろう。

フィリピン

アナベル・ダフィエルモト(Anabelle Dafielmoto)博士は、フィリピンの南部、ミンダナオのノートルダム大学（コタバト）の教授であり、キリスト教徒、ムスリム、その他の宗教の指導者たちを集めて話し合うグループであるReligious Pluralismの創立者である。博士は初めに、フィリピンのカトリック大学に広く浸透している、学生全員に、彼らの信仰が何であれ、キリスト教神学の科目を必修させる方針をまず指摘した。しかしながら、彼女が活動している南部では、まさにキリスト教徒とムスリムとの間の対立があるために、1990年代以来、宗教学がますます浸透してきている。宗教学は、神学も組織宗教もできなかった基礎を提供し、イスラーム研究や平和研究のような科目もたやすく統合してしまうことを示した。この意味で、宗教学は対話の推進に役立っている。

Religious Pluralismの会合はこのモデルに従って、さまざまな伝統（モルモン教徒、セブンスデー・アドヴェンティスト、監督派、ペンテコスト派、バプティスト、および仏教徒や中国宗教のグループ）の代表が集う月例フォーラムを開催して、友好的な雰囲気の中でそれぞれの信条を表明する機会を提供している。その成果として、ムスリムとキリスト教徒の対立に関するメディアの報道よりも、宗教的多元主義の――宗教伝統の多様性という意味でも、それら諸伝統間の平和を求める深い願いという点から

見ても――より正確な描写を提供している。

幅広く代表を出しているフィリピン・カトリック大学協会もまた、異文化間および諸宗教間の対話に関する独自のシンポジウムやワークショップを開催している。これらの努力が目指す態度の変化こそが対話に具体的な焦点を与え、このことが次に、大学におけるさらなる宗教研究を支えている。

韓国

名古屋の金城学院大学の教授である金承哲博士は、伝統的に多元主義的な韓国宗教の全景を概観した。そして、そのような背景のもと、多元性を構成している宗教間の対話に関して、韓国における対立し合う神学的見解について論じた。

最も積極的に宗教間対話を推進してきたのはキリスト教徒であるが、彼らは明らかに少数派である。「宗教」という言葉がほとんどタブーであるのは、キリスト教徒の間でこそずっと普通なのである。これには歴史的な理由がある。キリスト教がようやく 1884 年に伝来して以来、それは近代化と結びつけられてきた。同時に、それは非キリスト教国である日本の植民地支配からの解放を象徴するようになり、また共産主義の北朝鮮との境界を画する線にもなった。キリスト教を韓国にもたらした韓国人宣教師は儒者や仏教学者と議論をするための神学的訓練はおろか、自分の信仰を批判的に理解する訓練さえも欠いていた。韓国人宣教師は単に儒者や仏教者を偶像崇拝者として退けるだけであった。

他方、東洋の多くの国によくあることだが、韓国のキリスト教徒にとって、他の宗教の他者性は外的な問題というよりは内的な問題である。それはいわゆる無意識のレベルで内部に見出され得る他者性である。シャーマニズム、儒教、仏教、キリスト教の発展と相互作用を研究することは、歴史的な過程を描写することであるばかりか、その歴史を受け継いでいる人びとの魂の肖像画を描くことでもある。このように見れば、キリスト教への帰属に中心をおき、それゆえに他宗教をことごとくキリスト教信仰の周辺に追いやるような対話は、解釈学的な描写の重要な一要素を見落とす危険を冒している。

伝統的な神学は、概して、このことに無関心であった。そのため、土着神学を行なったり諸宗教の神学を創ろうとしたりした初期の試みは、地歩を築くことができなかった。産業化の非人間化的影響力や貧しい人びとを組織的に社会の周辺部に追いやることに対して、宗教的基盤からの批判を行ったことは、少なくとも当初は、Minjung theology（民衆神学）という比較的好ましい光の中で宗教的多元性の問題を提起するのに役立ち、キリスト教的でないものは全て排する傾向をいくらかとは言え和らげもした。しかし、宗教間対話の課題は、客観的問題としてだけでなく、韓国のあらゆる信仰の信奉者の自己理解の問題としても残っている。

日本

南山宗教文化研究所の研究員で日本における宗教間対話の歴史の専門家である山梨有希子は、日本における宗教的多様性――その幅広い概略はすでに研究所の今までの所報の読者によく知られているところである――と半世紀以上にわたって宗教間対話に払われてきた努力を数分で要約するというとてつもない課題に取り組んだ。彼女は初めに、日本で行われてきた対話のうち三つの形態を抜き出した。

東西の修道者の間の交流は、1979 年にさまざまな仏教諸派――禅、浄土、日蓮、真言――の僧侶が西洋の修道院で修道生活をともにするために招かれたことから始まった。これに引き続いて 4 年後には、今度は西洋の修道士・修道女が日本の寺院に招かれ滞在することに

なった。その後、このような交流が 9 回行われたが、そのほかに多くの個人が、こうした先駆的努力の成果として確立された協力のネットワークを利用した。日本側では、花園大学の禅研究所が先導的な役割を果たしている。

こうした精神的なレベルでの「言葉なき対話」に対して、アカデミックなレベルでは、たいていは学者でもある信仰者の間での活発な対話が行われている。南山宗教文化研究所はこのような出会いを数多く支援し、過去 25 年間以上にわたってそれらの成果を出版してきた。こうした対話ないし出版の例は数え切れないほどある。

三つ目は、いわゆる「宗教間協力」である。日本において最も注目に値するこの種の対話は、平和運動の分野に見られる。これは、ある部分、第二次世界大戦においてこの国に投下された原子爆弾の今でも鮮明な記憶と、戦争遂行に能動的にせよ受動的にせよ関与したことに対して多くの宗教的個人と宗教機関が同じように鮮明に感じている悔恨とによる。

1962 年に発足し、その傘下に仏教、キリスト教、そして独特な形で新宗教のさまざまな平和運動を包含した日本宗教者・平和協議会は、核兵器およびあらゆる人種差別の廃止を推進しようと努力してきた。これらの努力は、政治的な活動領域には関わらないようにして、宗教的あるいは人道主義的な観点から社会のあらゆるレベルに訴えようと試みてきた。1970 年に世界宗教者平和会議（WCRP）の最初の国際会議が開かれてから、この協議会は日本の代表的な宗教伝統以外の伝統も話し合いに引き込む必要があることを意識している。

1999 年に開かれた WCRP の第 7 回大会は世界中から 1000 人以上を集めた。2001 年 9 月 11 日の事件の後、このグループはその努力を強化した。2003 年のイラク戦争の後、平和運動に専心する新しいグループも起こり、宗教団体からの支援を受けたデモと会合もますます増えている。

日本で宗教間協力が非常に成功している理由の一つとして、全般的に、教義上の相違をめぐっての対決を避け、共通の関心事に焦点をあてる傾向があげられる。日本の歴史上、宗教的対立がなかったということではないが、複数の宗教伝統の儀礼に参加するという広く行き渡った慣習と結びついて、宗教間の協和が今日では広まっているのである。このため、学問的および教義的に焦点をあてる対話は、現在の宗教の平和的共存と協力を脅かすものと見る人々さえもでている。それでもやはり、そうした相違をいつか共通のフォーラムに持ち出さなければ、その相違が未来の対立へと燃え上がる危険が常に存在すると山梨は結論づけた。

ジェームズ・ハイジック
本研究所第一種研究所員
邦訳　山口亜紀
やまぐち・あき
本研究所研究員